



Optics Japan について

応用物理学会学術講演会（秋の応物学会）と Optics Japan (OJ) が続く学会シーズンが終わり、会員の皆さまには、一息ついておられる方も多いと思われます。ところで今年の OJ には参加されましたでしょうか？「光科学および光技術調査委員会（旧文献抄録委員会）」では、委員をはじめ若い会員の方々を対象に、OJ が各自にどのように位置付けられているかを調査しました。今月はその結果報告です。

OJ は本誌「光学」および「Optical Review」と並ぶ日本光学会の事業の3本柱の一つです。例年、秋の応物学会の前後に開催され、約200件の発表と400名近くの参加者があり、日本光学会主催の秋の講演会として定着しています。招待講演、特別企画、懇親会など、学術講演会としての体裁も整ってきました。このように一見順調のようですが、意見を求めると予想以上に厳しい返答が多数集まりました。その代表的なものを次に紹介します。

「以前はもう少し、秋の応物との間に、コンセプトの相違があったような気がしますが、最近は講演時間以外の差がほとんどありません。（注：締め切り日も同じになってしまいました）。分科会のアイデンティティの維持という観点からは、研究発表の場を提供する必要性は感じますが、現在は逆に、会員の負担を増しているだけであると思います。知り合いに聞いてみましても、どちらか一方にしか出席しない人が結構増えてきている気がします。かといって、全く別の時期に行われても、出張旅費の負担が一層増えるだけです。結局、発表の場が二重になっているだけで、これではデメリットしかないような気がします。同じような内容の発表を両方で聴く場合もあり、時間を無駄にしている気もします。（続く）」（注：'98年は講演時間も応物と同じ15分でした。）

委員会では多くの意見をいただきましたが、OJ に対する問題点の認識は共通しています。上述のように、応物学会との差がないため、ほとんどの方は OJ に発表する理由が明確ではありません。また、応物と絡めた長期開催による負担感も強いようです。

以上のように、OJ の企画には長期の日程や旅費の負担を克服するだけの魅力が求められています。「応物と同じなら負担が残るだけ」というのが議論の結論でした。それから、現在の OJ は皆さんの意識的な協力で成り立っていることも見逃せません。

OJ に対する改革案も数多く提案されました。しかし、その内容はさまざまであり、共通するものは見つけられませんでした。以下にいくつかを紹介します。

大改革としては、「秋の応物の光のセッションに独自性を持たせ、独自の講演会（OJ）は廃止する」と「日本光学会は学会として独立し、OJ を年2回の講演会にする」の両派がありました。

現在の OJ に特徴を与える方向では、「基礎的な分野を強化し学術色を出す」や、「講演募集の際の分類分科名は応物より多くのキーワードを提示し、応物学会や日本光学会以外の学会からも参加できるように、より広い範囲をカバーする」「国際会議にならって、ホテルを借り、招待以外の講演はすべてポスター、夜間も軽食・飲料つきで開催する」「セッションごとに招待講演を行ったり、チュートリアル講演を増やす」などがありました。

また、開催時期などについても、「春の光学シンポジウムと OJ を一緒にして、開催時期は応物と離す」「12月または1月の開催とし、秋の応物に間に合わなかった大学院生の発表に使いたい」の意見がある一方、「応物と離しての開催は負担を増すだけ」という逆の意見もありました。その他、「開催地は小都市（観光地）で」や「講演申し込みの締切は応物より1~2週間遅らせる」などの提案もありました。

意見の内容はそれぞれ異なっており、両立しないものが多く含まれています。しかし、いずれも「応物との差、OJ の独自性」をどのように作っていくかについての提案です。裏を返せば「OJ の独自性」が疑問視されています。招待講演やチュートリアル講演、観光地での開催などは参加者を募るものではあっても、本質的な改革案ではありません。どうすれば OJ に独自性が与えられるか、難しい問題です。

はじめに述べたように、当初の予想以上に厳しい意見が集まりました。若い会員の方々は、日本光学会のアイデンティティについては理解しつつも、OJ のために使う時間と費用に引き合うだけのメリットを求めています。今回の調査では、OJ の今後の運営に注目されている方が少なくないように感じられました。

この記事に関してのご意見は kikuta@measure.mech.osakafu-u.ac.jp、または itoh@bk.tsukuba.ac.jp までお寄せください。